

ノーカット版

《イドメネオ》 上演顛末記

初演以来225年世界は《イドメネオ》を認め始めた

門 良一（モーツァルト室内管弦楽団常任指揮者）

★《イドメネオ》との出会い

《イドメネオ》を知ったのはいつ頃だったろうか。私のモーツァルト歴というか受容史の中ではかなり新しい部類に属する。アリアや重唱曲は何度か演奏する機会があった。特に第2幕のイリアのアリア《たとえ父を失うとも》は4つの管楽器のソロがからむ名曲で、よく知られている。オペラとしてその全貌を知ったのはメトロポリタン歌劇場のビデオによってであった。このビデオは1982年の公演によるもので、バヴァロツァイのタイトル・ロールをはじめとする超豪華キャストである。特にあのバヴァロツァイがモーツァルトを歌う、というのが話題になった。また、名演出家ジャン・ピエール・

ポネルが演出だけでなく舞台装置、衣装も担当した見事な舞台であった。この映像はNHKの衛星放送で何度か放映され、レーザーディスク（現在廃盤）も出ている。

《イドメネオ》との出会いは衝撃的であった。モーツァルトは25歳の若さで、こんなにも重厚で長大な劇音楽を書いていたのだ。《イドメネオ》が他のオペラと違うところは、題材がギリシア神話から採られていてスペクタキュラーな場面が多いこと、恋愛沙汰だけでなく親子の愛情も描かれた真摯なドラマであること、合唱の重要度が非常に高く、すばらしく劇的な展開が多いこと等であろう。音楽全体が非常に豊かで、和声進行や管弦楽法がそれ以後のオペラに比べても非常に新しく、当時の前衛音楽といつていい。

なによりも音楽のあり方がまっすぐで、たとえればストレートの剛速球オンリーといえよう。この音楽なら雄大さにおいてベートーヴェンに決して負けないし、ワーグナーにも引けを取らない。モーツァルトは古典派に属するわけだが、「モーツァルトはロマン派だ」という人も多いのもうなづける。《イドメネオ》にはところどころブラムスやマーラーをも髣髴とさせる部分があつて、極めてロマンティックである。

モーツァルトの有名なオペラ、《フィガロの結婚》や《ドン・ジョヴァンニ》もすばらしいオペラだが、私にはこれらのオペラは人工的でわざとらしく感じられるという違和感がつきまわっていた。たとえば、《フィガロ》の最終場面、伯爵がひざまずいて伯爵夫人の赦しを乞うところはあまりにも真摯過ぎないかと思うのである。《ドン・ジョヴァンニ》は全体にオペラ・ブッフア的なおもしろおかしいところと、シリアスなところがアンバランスで、どうにも落ち着かないオペラに感じられた。《イドメネオ》を知ってそれらの違和感の原因がわかったのである。モーツァルトの本当に書きたいオペラは《イドメネオ》のようなオペラ・セリアであった。注文によってオペラ・ブッフアを書いていてもセリアの手法が顔を出してしまうというわけである。これにはモーツァルトのまじめな性格も大いに与っていると思う。近年に喧伝された「アマデウス」的性格はモーツァルトのほんの一面に過ぎないのである。

とにかく《イドメネオ》は私のモーツァルト

観を変えてしまった。以来、『イドメネオ』のビデオ、CDを買いついたものである。この中には、若いバヴァロッティがイドメネオでなくイダマンテを歌っているもの、リヒャルト・シュトラウスの改編したものなど、珍しいものもあつてちよつとしたコレクシヨンになっている。

★『イドメネオ』というオペラ

このオペラは、まずイタリア語テキストによるオペラ・セリアである。オペラ・セリアは題材をギリシア・ローマ神話や聖書に依つていて、神の尊さや主人公の徳を称える内容が古くさくもあり、主要な役にカストラート（男声ソプラノ）があてられるせいもあつてモーツァルトの時代にはかなり廃れてきていた。『イドメネオ』は「オペラ・セリアの最後の、最高の傑作」といわれる（このオペラのイダマンテの役は元来カストラート用である）。

さらにこのオペラは、当時パリで流行していたフランス風グランド・オペラのスタイルも有している。これは依頼主のバイエルン選帝侯カール・テオドールのフランス好みによるのである。その特徴は、オペラを構成している各ナンバーが完全終止せずにつながっている場合が多いこと、合唱や重唱が重要であること、劇中にバレエが挿入されることなどである。この各ナンバーの連続は、聴衆の拍手やブラボーを拒絶するけれども、ドラマの進行上は望ましいといえる。『イドメネオ』の、たとえば第1幕第4番のエレットラのアリアのあとに第5番の難破

船の合唱が続くところなどは、まるで映画の場面転換を見るような劇的效果がある。合唱ナンバーは8曲もあり、このオペラの主人公は群衆であるともいえる。バレエ用には『イドメネオ』のためのバレエ音楽K367が作曲されている。

このオペラの問題点は、異なるバージョンが無数にあることである。それは次のような事情による。モーツァルトは作曲を進めるかたわら台本の変更を作者のヴァレスコに再三要求した。「長すぎる」というのがその主な理由である。特に第3幕が長い。最後は作者に容れられないとみて、完璧に作曲されたアリアやレシタティーヴォをミュンヘンでの初演の直前に無断でカットしているのである。作曲者自身によるこのカットは当時は初演の歌手たちに惜しまれ、今日ではそのうちのいくつかは復活されることが多い。さらに、5年後の1786年のウィーンでモーツァルトはこのオペラを私的なかたちで再演する機会があり、その際にイダマンテ役がカストラートからテノールに変更され、それにしたがってアリアや二重唱が新たに作曲されたという事情が加わる。つまり、ミュンヘン版とウィーン版の二つがある上に、カットされたナンバーのうちどれを復活させるかでさらに多くの異なるバージョンがありうるわけで、『イドメネオ』のスタンダード・バージョンは今日まだ確立されていないといえるのである。

★『イドメネオ』の上演へ

さて、作品に感動するとそれをどうしても演奏したくなるのが私の習性である。生来のマイナー志向もある。『イドメネオ』こそはモーツァルトの最高傑作と信じ、何としても演奏会のプログラムに取り上げたいと考えるようになった。ここ数十年モーツァルト室内管弦楽団の定期公演でオペラを演奏会形式で取り上げるへモーツァルト・オペラシリーズをやってきている。そのシリーズで『イドメネオ』上演が実現したのが5年前2001年の公演であった。これは楽団創立30周年第100回記念定期演奏会の演目としてであった。このときの演奏バージョンは、メトロポリタンのビデオを参考にしていると同じ形で行った。それでも3時間を越える大演奏会となった。聴衆には好評を得たが、知名度の極めて低いオペラのお客の入りは最悪であった。

このときのプログラム・ノートに私は次のように書いている。「モーツァルト本人が何としようとするカットに近い形での演奏が理想であろう。次の機会があれば試みたいと思う次第である。」5年後の今年2006年は「モーツァルト生誕250年」である。この記念すべき年に誰もやらないことをやりたい、それは5年前に誓った『イドメネオ』ノーカット版上演しかなければ、これは今まで世界中で誰もやっていないはずである。CD録音でもノーカット版は存在しない。私の知る限り最長のCD録音は2002年に出したマッケラス盤であるが、第3幕の「神託の声」の直前のレシタティーヴォがカットされている。

CDでもそうだから実演でのノーカットはありえないはずだ。これが今回「世界初オリジナル・ノーカット版」と銘打った根拠である。

われわれにとつて2度目の《イドメネオ》上演であるノーカット版演奏会形式上演は、モーツァルト室内管弦楽団創立35周年記念第115回定期演奏会として2006年1月9日に大阪いずみホールで開催されることになった。出演者のうち主役級の4人は、イドメネオは前回と同じ畑儀文氏、イダマンテは他の曲で何度か協演している野間直子さん、イリアには目下人気絶頂の石橋栄実さん、エレットラは前回イリアを歌った津山和代さんに決まり、準主役級もアルバーチエに二塚直紀氏、大祭司に松本晃氏、ネプチューンの神託の声は前回と同じ木川澄氏となり、期せずして関西の精鋭歌手たちが一堂に会することになった。合唱は1991年「モーツァルト没後200年」の創設以来協演を重ねている盟友、モーツァルト記念合唱団で、合唱指揮はその創設者で今回の企画の制作者のひとりでもある益子務氏である。

★なぜ「ノーカット版」なのか

今回、ノーカット版にこだわった理由はなにか。それにはモーツァルトが作曲中に故郷の父親宛に書いた手紙を読んでいたきたい。『親愛なるお父上！ 僕は頭も手も第3幕で一杯すぎ

て、僕自身が第3幕になっちゃっても、それは奇跡なんかじゃないといえるくらいです。第3幕だけでオペラ全部以上の苦勞をしました。だ

ってあまり興味をひかない場面というのが、この幕にはほとんどないのですから。』(1781年1月3日の手紙)。つまり、ヴァレスコの台本は長いという欠点はあるが、よくできていたのである。モーツァルトはその台本に魅了されて完璧に音楽をつけてしまったのである。モーツァルトの全生涯で《イドメネオ》のときくらい、なんにも制約を受けず自由に思う存分作曲できるときはなかったのではないだろうか。モーツァルトがそういう状況で書いたとき、まちがいはなくその音楽は長く、そして密度の高いものになるのである。モーツァルトさん、台本が長い長いとおっしゃいますが、そもそもあなたの音楽が長いのですよ。

《イドメネオ》の長さは、われわれの今回の上演で第1幕と第2幕がそれぞれ1時間、第3幕が1時間半である。モーツァルトも第3幕のあまりの長さにカットを決意せざるを得なかった。しかし長いからといってカットを行うと、全体のバランスが壊れてしまうのである。モーツァルトは音楽のシンメトリーを重んじる作曲家で、主役級の4人にそれぞれ3曲ずつのリアアを与えているが、カットによってイリア以外の3人のアリアが2曲ずつになってしまふ。それに終幕近くで主役のイドメネオと準主役のイダマンテのアリアはどうしてもほしいではないか。

長い長いといってもワーグナーの楽劇に比べたらずうっと短い。ここはひとつ、モーツァルトが思う存分に書いた音楽を全部楽しもうでは

ないか。イダマンテ、エレットラ、イドメネオのアリアはどれもカットするにはあまりにもすばらしい音楽なのだ。「神託の声」の前のレシタティーヴォにもこの世ならざる夢のような音楽が詰まっている。世の中には《レクイエム》のようなモーツァルトが完成しなかった作品をいろいろと補作したがる輩がいつばいいいが、そんなことにかまけるよりモーツァルトが完璧に書いたものをカットしないで演奏することのほうがよっぽど肝心であろう。

★いよいよ本番

さていよいよ本番の日、朝十時半からのステージ・リハーサルである。そのための時間は3時間半しかない。休憩も取らなければならないから全曲通せないのである。このオペラは前述のようにフランス・スタイルで各ナンバーの間がつながっているところが多い。またそのつながりの部分が練習しなければならないところでもあるので、仕方がないから各ナンバーの中間を抜いていく。「ああ、だめだ、うまく行かない。やっぱりこんな無茶な企画は無理なんだ。俺もこれで終わりだ。」こんな思いがこみ上げてくる。実演奏時間3時間半、誰もやらないはずである。普通のコンサート2回分、いや2回同じことをやる方がはるかに楽だ。絶望的な気持ちでリハーサルを終えた。

いよいよ本番、意を決してステージに出る。ここまで来たら開き直るしかない。長いからといってエネルギーの配分や体力の温存など考え

まい、初めから全力投球だ、それが《イドメネオ》という音楽の本質でもある、と自分に言い聞かせ序曲の開始を振り下ろした。それから4時間は夢のように過ぎていった。演奏が進むにつれ歌手たちも合唱もオーケストラも乗りに乗っていくのが感じられた。リハーサルの折のあの絶望感は完全に吹っ飛んでいた。聴衆がぐんぐんと引き込まれていくのが背中でもわかった。またそれがステージの上にはね返ってきて演奏に一層熱が加わるといふ、願ってもない雰囲気



▲モーツァルト室内管弦楽団35周年記念公演「イドメネオ」

になった。自分でも余裕たっぷりになって神がかった感じがわかった。こんなことは十年に一度あるかないかである。これはいつたいなんなのだろう。いや、これは《イドメネオ》だからだ。これが《イドメネオ》の音楽の力なのだ。

終演後、周りの感想を聞くと、「4時間を長く感じなかった」、「ものすごく感動した」、「最後まで引き込まれた」というようなものばかりであった。オーケストラや合唱のメンバーも「楽しかった」「感動しながら弾いていた」「長いと感じなかった」といつてくれた。本当に奇跡が起きた。モーツァルトの霊が舞い降りたんだ、と誰かがいった。

本番後の打ち上げの席で、私は急激に襲ってきた疲労感をビールで追いやり、幸せな気分を味わった。あんなに長かったのに、あんなにしんどかったのに、誰もが喜んでいる演奏会ができて本当によかった。2006年1月9日、わが生涯最良の日となるであろう。

★《イドメネオ》における

モーツァルトの再発見

後日、絶賛の感想が多く寄せられた。「格調の高い緊張感に満ちていた」、「指揮者がこのオペラをみんなに知ってほしいという熱意がよくわかった」、「4時間を最後まで引き込まれた」等々。ほとんどの人がこのオペラを知らなかったであろうことを考えれば、このような感想を引き出したことは演奏の勝利といえるであろう。新聞や雑誌の批評も好評であった。おもしろい

のは複数の批評の中に「主役はモーツァルト」、「モーツァルトのおかげ」という表現が見られたことだ。これはこの演奏によって批評家自身があらためて《イドメネオ》のすごさを思い知らされたことを意味している。

このオペラは1781年の初演以来ほとんどかえりみられることなく20世紀半ばにいたるまでうずもれていた。「もつと短く書け、もつとやさしく書け」というのはモーツァルトの父親レオポルトが死ぬまで息子にいい続けた言葉だが、これは《イドメネオ》の「失敗」に懲りてのものだと思う。父親の言い付けを忠実に守って書いたのが《フィガロの結婚》であり、これはモーツァルトのオペラで最もポピュラーなものとなった。しかし、《イドメネオ》を知ればモーツァルトの世界がもつと奥深く広大なものであることがわかる。《イドメネオ》は従来のモーツァルト像から大きくはみ出した巨大な作品なのだ。それにしてもここ数年の《イドメネオ》のブームはすごい。今年1月27日、モーツァルト満250歳の誕生日にはウィーン国立歌劇場での上演があった（小澤征爾氏が振る予定であったが病気のため降板したというニュースは大きく伝えられた）。また、今夏のザルツブルク音楽祭はモーツァルトのオペラを全部上演するのだが、その最終日が《イドメネオ》なのである。初演以来225年、世界はようやく《イドメネオ》を認めはじめたのだ。われわれは日本の大阪でその一翼を担えたことを誇りに思う。